

はじめに——大分岐の時代に

斎藤幸平

人類は、今、胸元に拳銃をつきつけられているような状態だ。「撃たないでくれ」と叫び、最悪の事態を避けるために、行動する選択肢もある。それなのに、「どうぞ撃ってください」と言っている。未来ではなく、終末を選ぼうとしているのは、私たち自身なんだ——。

これは、本書の第二部に登場する哲学者マルクス・ガブリエルの言葉だ。

ここでどのような選択をするかによって、人類の未来は決定的な違いを迎える。そのような「大分岐の時代」に私たちは生きている。

大げさだと言われるかもしれない。しかし、今回、議論を重ねた知識人たちは、おおむね、このような共通認識をもっていた。

実際、現代社会は出口の見えない債務危機や極右ポピュリズム、気候変動といった多くの問題に直面し、危機は日に日に深まっている。

ところが、インターネット上にはヘイトスピーチがあふれ、フェイクニュースが事実を歪め、危機への対策を遅らせている。さらには、G A F Aに象徴的なプラットフォームの独占状態は、情報プライバシーを脅かすとともに、アマゾンやウーバーは不安定な低賃金労働を生み出し、貧富の格差を深刻化させている。

要するに、テクノロジーは中立的なものではないのだ。テクノロジーは、知や権力を構造化し、利潤のために世界を再編成する手段だからである。

したがって、情報テクノロジーの急速な発展が、世界中の人々を水平的・同時的なネットワークにつなぎ、数多くのイノベーションや価値創造の源泉にもなっていると、新しい技術に規制をかけずに、ただ技術を加速させていくならば、待っているのは「サイバー独裁」、あるいは「デジタル封建主義」だろう。

シンギュラリティの時代がもたらすのは、普遍的な人権や自由・平等が否定される「人間の終焉」かもしれないのである。

最悪の事態を避けるためには、資本主義そのものに挑まなければならない危機的段階にきているのではないか。それが本書の問題提起である。

ところで、「危機」(crisis)の語源を遡ると、ギリシャ語の *krisis* (krisis) に由来し、ヒポクラテスによって、「疾病の転換点」という使われ方をしていた。症状は、好転するかもしれないし、悪化するかもしれない。病状の見立てを正しく行い、適切な手当てをすれば、快方に向かう。だが、対処を誤れば、取り返しのつかない事態となる。危機とは、そのような重大な分岐点を指す。

危機を好機に変えるためには、多くの人々が団結できるような新しい社会の展望を提示する必要があるだろう。本書はそのための第一歩である。マイケル・ハート、マルクス・ガブリエル、ポール・メイソンという、危機に真っ向から立ち向かい、この先を見つめる知識人たちとの対話を通じて、未来をつくる方法を探っていくこととしたい。

目次

第一部 マイケル・ハート

第一章 資本主義の危機と処方箋

資本主義の危機／資本主義の「飼い馴らし」は可能なのか
社会民主主義で解決するのか／資本主義がつぶす人々の自由と能力

第二章 政治主義の罨

政治の機能不全と右派ポピュリストの台頭／なぜ階級の違う政治家に親近感を抱くのか
ウォール街占拠運動とサンダース現象の連続性／水平的な社会運動の「敗北」
社会運動から学んでいったサンダース／重要なのは政治家よりも社会運動

コーピンを支えたのは誰か／選挙が民主主義のすべてじゃない！

政治主義の罨——なぜ日本で社会変革が起きないのか

日本版オキュパイ運動と「次なる湯浅」探し／社会と経済の次元の民主主義

第三章

〈コモン〉から始まる、新たな民主主義

63

〈コモン〉とは何か／〈コモン〉を民主的に管理するという経験／〈コモン〉と社会運動

〈コモン〉としての地球／地球からの掠奪／「所有」の論理を乗り越える

第四章

情報テクノロジーは敵か、味方か

81

「発展」の意味を問い直す／機械を使う社会の秩序／「発展」を「掠奪」から切り離す

非物質的労働の時代／マルチチュードの主体性

労働者の自律性は高まった？——AIとシェアリングエコノミー

GAF Aとどう闘うのか／押しつけられる「自律性もどき」

第五章

貨幣の力とベーシック・インカム

108

ベーシック・インカムは救世主なのか／貨幣の力をどう見るか

「人々のための量的緩和」／新しい民主主義の可能性——ポピュリズムからミニシバリズムへ

第二部 マルクス・ガブリエル

第一章 「ポスト真実」の時代を生んだ真犯人

哲学とグローバルな危機／ポスト真実の時代を生んだのは誰だ？

相対主義が民主主義の危機をつくり出す

「ニューヨーク・タイムズ」はプロバガンダ？

ヘイトスピーチと言論の自由／普遍的価値は存在するのか

ポストモダンの言語を操るブーチン／一九六八年の病理的論理

第二章 「人間の終焉」と相対主義

人間の終焉？／政治、嘘、恐怖

ポストモダニズムの限界——ニーチエとハイデガー

第三章 新実在論で民主主義を取り戻す

社会構築主義の問題点／事実を取り戻すための新実在論

なぜ世界は存在しないのか／意味の場と存在

厳然たる事実／自然科学に特権を与えない

新実在論が民主主義を再起動させる／自明なものの政治

熟議型民主主義と倫理の普遍性

169

第四章 未来への大分岐——環境危機とサイバー独裁

目前の危機と民主主義／次世代のために環境をどう守るのか

AIに決定をゆだねたがる人間の弱さ／精神なきサイバー独裁

195

第五章 危機の時代の哲学

定言命法と無知のヴェール／啓蒙の復権

ラディカル・デモクラシー vs. 左派ポピュリズム

難民問題——「恐れ」の感情にどう向き合うか／危機の時代の哲学

209

第三部 ポール・メイソン

228

第一章 情報テクノロジーの時代に資本主義が死んでゆく

230

歴史の転換点としての二〇〇八年金融危機／「コンドラチエフの波」が告げる資本主義の終わり
成長の鈍化と生産力の過剰／情報技術が「潤沢な社会」をつくる
限界費用ゼロ社会の到来／ポストキャピタリズムへと導く四つの要因
資本主義の終焉期のジレンマ——情報経済では債務返済が不可能

第二章 資本の抵抗——GAF Aの独占はなぜ起きた？

261

ポスト・キャピタリズムへの移行を阻む四つの要因／デジタル封建主義の時代？
自由市場の機能不全と資本主義の黄昏

第三章 ポストキャピタリズムと労働

272

オートメーション化は脅威か、福音か？／資本の支配とブルシット・ジョブ

第四章 シンギュラリティが脅かす人間の条件

283

一般的知性とインターネット／インターネット民主主義 vs. データの非対称性

加速主義の問題点／人間の主体性が未来をつくる

テクノロジーが突きつける「人間とは何か」という問い

サイバー独裁に抗うためのヒューマニズム／自由こそが人間の条件／AI時代の普遍的道徳

第五章 資本主義では環境危機を乗り越えられない

310

環境危機がポストキャピタリズムへの契機となる／グリーンニューディールをどう見るか

第六章 生き延びるためのポストキャピタリズム

318

人間による管理／ポストキャピタリズムと国家の役割／ポストキャピタリズムの未来

おわりに——Think Big!——

齋藤幸平

336

註

343

第一部

マイケル・ハート

(政治哲学者・デューク大学教授)

グローバル資本主義が変容させる政治・経済の姿を描き切った

『帝国』三部作(アントニオ・ネグリとの共著)は、

「二二世紀の『共産党宣言』」と呼ばれた衝撃作。

その大著の予見の正しさが日々、証明されるなか

新たな権力の形にいかに対抗するか戦略を模索し続け、

ウォール街占拠運動をはじめとする、

さまざまな社会運動の理論的支柱となっている。



Michael Hardt

第一章 資本主義の危機と処方箋

▼資本主義の危機

斎藤 時代の大きな転換期にいる今、あなたと議論できる機会に恵まれて、とても嬉しく思っています。アントニオ・ネグリと共に、世に問うた名著『〈帝国〉』¹がまさにそうなのですが、危機の時代にあっても「Think Big!」、つまり大きなスケールで思考し、行動するよう人々に呼びかけている思想家があなただからです。

日本では、バブル崩壊以降、政治や経済の状況は悪化するばかりで、社会は閉塞感に包

まれています。こうした状況の根本原因は、資本主義そのものにあると私は考えています。しかし、世界ではこの閉塞感のもとで絶望し続けることをやめ、資本主義に代わるオルタナティブをつくろうとする胎動が確実に始まっています。この対話のなかで、そうした新しい動きの意味を掘り下げていくことで、希望の入口を見出すことができるのではないかと期待しています。

マイケル・ハート（以下MH） ええ、さっそく始めていきましょう。日本の状況や人々の意識にも興味があるので、楽しみです。

齋藤 議論の入り口として、「資本主義の危機」という問題を概観していききたいと思います。

ローレンス・サマーズ元財務長官の議論が有名ですが、リーマン・ショックを端緒にした世界的な経済危機から一〇年以上経った今でも、各国政府による大規模な財政出動や金融緩和にもかかわらず、世界経済は長期停滞からなかなか抜け出せていません。

たとえばアメリカの経済成長率は、二〇〇八年以降ずっと二%台前半が続いており、リーマン・ショック以前の二%台後半という成長トレンドに戻っていません²。

リーマン・ショック以前の成長トレンドと五年後の国民総生産を比較した損失割合のデ

ータが図1ですが、現在でも損失割合が大きい状態に変化はありません。

MH 資本主義が行き詰まっていることは、間違いないですね。

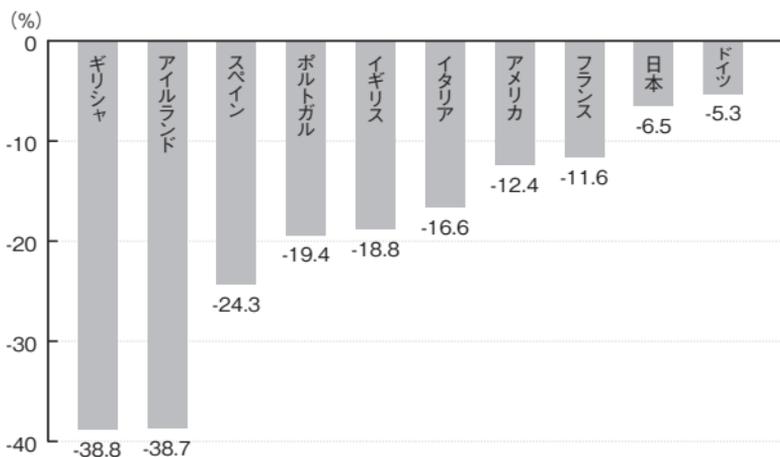
齋藤 さらに、世界経済の長期停滞と並行する形で、先進国の中間層が没落し、経済格差が深刻化している。ウォール街オキュパイ（占拠）運動で有名になった、「九九% vs. 1%」というスローガンが人々の心をつかんだのは、その深刻さの現れでしょう。

▼資本主義の「飼い馴らし」は可能なのか

齋藤 こうした状況を前に、トマ・ピケティやジョセフ・スティグリッツ、ロバート・ライシュといった主流派の経済学者や知識人たちも、新自由主義を批判し、大きな共感を呼んでいます。日本でも、水野和夫の「資本主義の終焉」をテーマにした本が大ヒットしました。³

ただ、ピケティら欧米の経済学者たちは、特定の政策を実行しさえすれば「健全な」資本主義が再び軌道に乗るはずだと信じています。つまり、グローバル企業や富裕層への課税率を上げる。暴走しがちな金融市場に対して厳しい規制を課す。緊縮財政もやめにして大規模公共投資を行い、労働者階級への再分配を増やして、新たな有効需要を創出すれば、

図1 リーマン・ショック以前の成長トレンドと比較した場合の国民総生産の損失割合(2008年~2013年)



Michael Roberts, *The Long Depression*, Chicago: Haymarket Books, 2016, p.115.を
もとに作成

万事うまくいくというわけです。

むき出しの市場原理主義を批判し、資本主義の「飼い馴らし」を主張するピケティやステイグリッツたちは、当然のことながら、リベラルな人々のあいだで「受け」が良く、日本でも大きな影響力をもっています。

しかし、あなたに伺いたいのです。こうした政策は、世界経済の危機に対する根本解決になりうるでしょうか。古き良き時代の社会民主主義的な価値観を復活させることで、危機を乗り越えることはできるでしょうか。

MH 端的に言えば、答えはノーです。あなたも、おそらく同じように考えていて、この質問をしていますよね。

齋藤 ええ。